

令和7年度 学校評価 自己評価書

あま市立秋竹小学校

1 総括

(1) 教育目標（学校経営案より）

学習指導要領の基本理念をふまえ、児童のすぐれた個性を伸ばし、個を生かす教育活動を通して、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな児童の育成を図る。

<めざす児童像>

- | | |
|-------|-----------------------|
| ○ 強く | 自他の生命を大切にし、たくましく生き抜く子 |
| ○ 正しく | 自ら学び、正しく判断できる子 |
| ○ 明るく | 礼儀正しく、心豊かで思いやりの心をもった子 |

(2) 本年度の重点努力目標

ア 確かな学力の育成に向けて

- ・ 体験的な学習、問題解決的な学習を重視するとともに、ICT機器の活用方法を工夫し、児童が自ら課題をもって主体的に学習を進め、他者との関わり合いにより、得た意見を基に自分の考えを含め、表現することができるよう授業の充実を図る。
- ・ 教師が指導の改善を図るとともに、児童自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるような学習評価を工夫する。

イ 豊かな心の育成に向けて

- ・ 「考え、議論する道徳」に向けた道徳科の授業の充実を図る。
- ・ 教育活動全体を通して児童の道徳性を深め、心のつながりを大切にした学級・学校づくりを図る。

ウ 健康・安全教育の充実に向けて

- ・ 体育的行事を計画的に実施するとともに、心身の健康課題に対する指導に取り組み、家庭の協力を得ながら、児童の基本的生活習慣の育成に努める。
- ・ 定期的な安全点検以外にも、遊具の安全な使用方法や廊下歩行の安全指導など、児童が安心して生活できる学校環境づくりに努める。また、避難訓練を随時行い、災害時に身を守るための適切な行動ができるように指導する。

エ 家庭・地域との連携

- ・ 学校運営協議会の場や、学校HP、学校通信等を通して、家庭や地域に本校の教育活動について積極的に発信する。
- ・ 地域の人的・物的資源を積極的に活用し、教育活動のさらなる充実を図る。

オ 働き方改革にかかる業務改善

- ・ CS（コミュニティ・スクール）を活用し、地域と連携して児童を取り巻く環境を工夫することで多忙化解消を図り、教職員が健康で充実して働けるよう努める。
- ・ 個々のタイムマネジメント能力向上を目指す。

2 自己評価の実施体制

(1) 調査時期 令和7年12月11日～12月18日

(2) 調査項目 別紙アンケート参照

(3) 調査対象 有効回答者数／対象者数

- ・ 児童 167名／全171名
 - ・ 保護者 101名／全137名
 - ・ 教職員 15名／15名
- 計283名

3 考察【児童・保護者・教職員の総括的考察】

(1) 児童の評価

「自分からあいさつできる」「周りの友達や先生から大切にされている」の質問に対しては、『あてはまる』または『あてはまる』と『ややあてはまる』の合計の割合が、前年度を上回る結果となった。また、「相談できる人がいる」「学校は楽しい」の質問にも肯定的に回答する割合が増加したことから、学校生活に対する安心感が向上したと言える。

「人の話をきちんと聞くことができる」の質問に対して、『あてはまる』と回答した割合は昨年度を大きく下回る結果となった。また、「早寝・早起きや歯磨きを毎日きちんとしている」「学校のルールを守っている」の質問にも、肯定的に回答する割合が減少したことから、自他への関心の低下が懸念される。

(2) 保護者の評価

全体的に昨年度に比べて、肯定的な回答が多かった。「学校目標を知っている」の質問に対しては、昨年度に引き続き『あてはまる』『ややあてはまる』の割合が大幅に増加した。続いて、「わが子は、自分からあいさつをよくする」「学校はコミュニティ・スクールとして保護者や地域と協働して教育活動を行っている」「わが子は、学習や生活を通して成長している」についても肯定的な回答の割合が増加し、その中でも「わが子は、学習や生活を通して成長している」については肯定的な回答の割合が極めて高い結果であった。また、「学校は、家庭・地域からの連絡や相談に丁寧に対応している」「教職員は、子どもに寄り添い、成長できるよう教育にあたっている」の質問に対しては、『あてはまる』の割合が大きく伸びた。これらの多くの高評価は、子どもへの期待や学校に対する関心の高さの表れであると考えられる。

「子どもの学習や生活について、担任や他の教職員に相談できる」という質問に対しては、『あてはまる』の割合が増加したものの、『ややあてはまる』を含めた肯定的な回答の割合は、昨年度を下回った。学校と家庭が、共に子どもの成長を願うパートナーとして、信頼関係に基づいた対話と情報共有ができる関係性を築いていけるように努めていきたい。

(3) 教職員の評価

どの質問項目に対しても、昨年度に比べて肯定的な回答の割合が減少する結果となった。その中でも、「学校は、経営方針や教育活動、課題を保護者に分かりやすく伝えている」「児童の安全や健康に配慮して教育を行っている」という質問に対しては、『あてはまる』の回答の割合は増加した。特に肯定的な回答の割合が減少した質問は、「児童は、自分の仕事（掃除・係など）にきちんと取り組んでいる」「児童は、学校のルールを守っている」で、集団生活の基本（土台）にあたる場所に課題を感じている教職員が多かった。また、「児童や保護者の声に耳を傾けるよう心がけている」「授業を工夫し、個に応じた学習を行っている」についても教職員は厳しい評価としており、改善すべき課題として受け止めている。

4 成果と課題

〈成果〉

- (1) 今年度も児童、保護者、教職員ともに、学校目標の認知度は高い結果となった。児童、保護者、教職員それぞれに目指すべきところ（目標）を明確にしてきたからこそ、今回のアンケートもそれを踏まえた結果として捉えることができる。今後も、目標を共有したり、時にはそれぞれの立場で目標に対して自己を振り返ったりしながら、より効果的で質の高い教育活動を実現していきたい。
- (2) 「自分からあいさつができる」という質問に対しては、児童も保護者も肯定的に受け止めている割合が増加した。児童については、高学年（4～6年生）において肯定的な回答の割合が高い傾向を示した。これは、児童会によるあいさつ運動や人権啓発運動等、高学年の児童が中心となって全校児童に働きかけたことが、高学年の意識改善につながったと推察する。

〈課題〉

- (1) 「学校のルールを守っている」の質問について、児童、教職員共に肯定的な回答の割合は昨年度を下回る結果となった。集団生活上のルールや規範を理解しそれらを守ることは、自他を大事にすることと同じである。児童も教職員もどこが問題点であるのかを振り返り、改善に努めていきたい。
- (2) 「人の話をきちんと聞くことができる」の質問についても、児童、教職員共に肯定的な回答の割合は昨年度を下回った。今年度から全校体制で「集団の一員としてよりよい生活づくりに参画する児童の育成」を研究テーマとして、話す・聞く力やソーシャルスキルの向上に取り組んでいる。この取組を通して、人の話を聞くということを以前よりも高いレベルで捉えたり、改めて容易なことでないことを認知したりしたことが、この結果の要因として考えられる。今後も話す力と共に聞く力も重要視し、研究を推進していきたい。

5 改善策

- (1) 学校生活の規範意識を高めるために、児童にルールや規範を理由とともに正しく理解させること、道徳の学習を中心として善悪の判断や、ルールやマナーに対して深く考えさせること、またそれらを行動に移す機会を多く与え、振り返らせることなどを通して、現状を改善していきたい。また、学校生活における規範意識を改善することで、地域での生活の安全性向上も期待したい。
- (2) 「聞く力」を育むことは、信頼関係の構築、深い理解、円滑なコミュニケーション、リーダーシップの発揮、問題解決能力の向上につながり、社会においても重要なスキルとされ、あらゆる場面で成功の基盤となる。その聞く力を高めるために、普段の学習の場面から、聞くことへの意欲をもたせていきたい。相手の顔を見て話を聞いたり、何について言及しているのか目的をもって聞いたりするなど、態度や意識を改善したい。相手を深いレベルで理解できるようになることで、発信力や客観性も身に付き、活躍の場を増やしていきたい。